8 読者の広場

漢詩紀行：中国・武漢

藤 野 仁 三※

昔、長江のほとりに辛という酒屋があり、一人の老人が連日のように入り浸った。辛は金を取らずに求められるままに酒を飲ませた。しばらくして老人は酒代の代わりにと言って壁に橘の皮で黄色の鶴を書いて立ち去った。ところがこの鶴は、客の手拍子がなると壁から出て舞い踊り、それが評判で酒屋は大繁盛した。10年後、その老人が酒屋に寄り、手を叩いて壁の鶴を呼び出し白雲に乗って去っていった。辛はそこに楼を建て、それが後世黄鶴楼と呼ばれるようになった。江南三大楼の一つとして有名で、昔から文人墨客が集まり、多くの詩文が残されている。

筆者がこの黄鶴楼を訪問したのが旧暦五月五日の端午の節句。戦国時代の楚の詩人で非業の死をとげた屈原の命日とされる。楼内の階段を上りながら同行の友人は、屈原を弔うために、竹筒に米を詰め、栴檀（せんだん）の葉で口をふさぎ、五色の糸で縛って献じたのが「ちまき」の由来だと語った。湖北省は屈原の生地でもあり、武漢市には屈原記念館がある。

その時の感慨を踏まえて次の詩を得た。

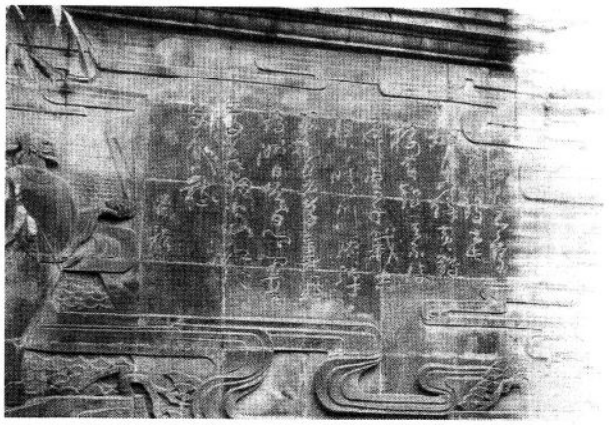
端午登黄鶴楼
入梅時節上高楼
細雨綿綿蔭樹洲
君説屈原吾李白
欲乗黄鶴古今游
（脚韻　:楼、洲、游）

中国には黄鶴楼を詠んだ漢詩は何百とあるそうで、手許の冊子「黄鶴楼詩文」には60余の古今の名詩が掲載されている。代表作が唐・崔顥の七言律詩「黄鶴楼」で、「昔人すでに白雲に乗りて去り、此の地空しく余す黄鶴楼」で始まる。境内の入り口に大きな石壁があり、そこにこの律詩が刻まれている（写真参照）。

後にこの地を訪れた李白が崔顥の黄鶴楼詩を見て、これ以上のものはできないと作詩を諦めたという伝説がある。とはいえそこは李白、代わりに送別詩「孟浩然の広陵に之（い）くを送る」という名詩を残した。「故人西のかた黄鶴楼を辞し、烟花三月揚州に下る。孤帆の遠影碧空に尽き、ただ長江の天際に流るるを見る」である。孟浩然は「春眠暁を覚えず」の作者として日本でも有名である。

拙詩では、崔顥の対句の末字「樹・洲」を使い「あの崔顥が見た漢陽の樹樹や鸚鵡洲が雨で見えない」という気持ちを込めた。

武漢の梅雨はドシャブリというのが定説であるが、筆者が訪問した日は降ったり止んだりの「細雨」であった。



写真：崔顥詩碑文（武漢市・黄鶴楼）

※東京理科大学専門職大学院　教授